



TITLE:

# [紹介] 中國における書論研究の現状と課題

AUTHOR(S):

大野, 修作

---

CITATION:

大野, 修作. [紹介] 中國における書論研究の現状と課題. 中國文學報  
1994, 48: 148-163

ISSUE DATE:

1994-04

URL:

<https://doi.org/10.14989/177555>

RIGHT:

## 紹介

### 中國における書論研究の現状と課題

#### 一

最近の書論、畫論に關する中國での出版情況は十數年前とは比較にならない著しい變化がある。いわばほとんど零に等しい狀態から、一種洪水の如き狀態への變化があるのであり、その整理を心がけねばならないことを痛感し、手許に情況把握のための備忘のノートを取っていたが、これを機に書論に限って文章にまとめてみることにした。ただし本誌の性格上の要請もあり、また書論という多方面にわたる領域を網羅的に紹介するには紙數も限られており、私の手にあまる點もあるので、書論の中でも文學に比較的關係の深いものに限定せざるをえなかったことを御了解願いたい。従って文房具としての筆、硯、紙、墨や篆刻等への

論及は必然的に省くことになり、また出土資料や石刻資料でも、碑刻の善惡を主眼とする論文、著書は對象外としてゐる。またはじめは論文を主として取りあげるべきであると考えたが、書を學問的に扱った論文は思ったよりも少なく、というより論文における研究の進展もほとんど零の狀態から出發せざるをえなかった書論という特殊事情から、工具書としての辭書等の整備情況をも述べる必要を感じたので、まず辭典と工具書的な意味合いの強い單行本について述べ、次に論文の傾向を分析し、その次に論文、雜誌でもれて扱いえなかった單行の書について見てゆくことを基本方針としたい。従って當初のもくろみに較べて論文以上に辭典の比重が高まってしまったことをおことわりしておきたい。

#### 二

まず工具書としての辭典から見てゆきたい。最も総合的且つ基本的辭典として

① 梁披雲主編『中國書法大辭典』上下二冊(書譜出版社

一九八四)

がある。本文を書體、術語、書家、書跡、論著、器具の六つの部分に分けて計一三六五〇項目を収め、書法全體を知るには便利でゆきとどいている。中でも「書體」の項は黃簡氏、「術語」の項は崔爾平氏の個人執筆であり、單行の本としてもよいだけの分量と内容がある。特に文學とのかわりで「術語」の部の、筆法、筆勢、筆意の章は全體への目くばりが行きとどき、出典もしっかり把握されていて讀める内容になっている。その他の章には批評用語、金石學、文房などが收められるが、項目が少なかったり、未整備の感はまぬがれない(後に増補改訂されて單本の書として刊行される。後述)。

また作品の鑑賞を中心としたものに、

- ② 劉正成主編『中國書法鑑賞大辭典』上下二冊(大地出版社 一九八九)

- ③ 周倜主編『中國歷代書法欣賞大辭典』上下二冊(北京燕山出版社 一九九〇)

紹介

の兩書が最近の流行にあわせたかの如くあいついで刊行さ

れた。②は①の「書跡」の部分を擴大し、作品中心に紹介とかなり詳しい賞析を加えるが、上冊は上古より宋代まで新しい成果が多く盛り込まれており、書道史の網羅的把握には便利な書となっている。下冊は元明清、近現代の書跡と篆刻が紹介されるが、宋以前とことなつて書體に對する意識が稀薄であり、詩人文人の書き残した資料集といった趣が強い。従つて通常の中國文學史では見落されてしまふ詩人、文學者が、書跡が残つていたために紹介されたりしており、思わぬ出会いと發見が期待できるのであり、眼で見る中國文學史に近い、楽しく讀める書になっている。

全體的、網羅的な辭典の紹介は以上にして(ちなみに杉村邦彦氏『書の基本資料⑩書論』中教出版刊一九九二が網羅的な紹介をしている)、目錄學的に注目すべき辭典として、

- ④ 張潛超主編『中國書法論著辭典』(上海書畫出版社 一九九〇)

⑤ 陳滯冬『中國書學論著提要』(成都出版社 一九九〇)がある。民國期に余紹宋の『書畫書錄解題』が書かれて以來、書論においてしっかりした解題書がないのを不便に感

じていたが、その缺を補うのがこの二著といえる。④は前半は後漢から當代までの論著に對する解題であり、後半は現代人の論文の摘録といえる。論文は主に「書法」「書法研究」「中國書法」「書法報」「書譜」「中國書畫報」に掲載されたものの中から選録しており、現代における（一九八七年まで）研究情況、水準を知るには最も便利な書である。

ただ論文が内容別でなく、筆畫順に並べられていて、何が議論の中心になっているのか見えにくい難點があり、また⑥にくらべ收録する論著はるかに多いのに、中國で出版されたものに限られているのが残念である。⑤は④の前半と内容的には似るが、④が編著という寄せ集めであるのに對し、⑤は陳滯冬氏が一人で書いたものだけに、余紹宋の解題の如く一本筋が通った感がある。最も重要と思われる部分には、原著の原文が引用してあって見やすい。また卷末には一九〇〇——四九（書學論文目錄）、一九六五——八〇（日本出版中國書學論著目錄）があつて参考になる。

次に文學にかかわる最も特筆すべき辭典として

⑥ 佟玉斌編著『書法成語典故辭典』（長征出版社 一九九〇）

がある。これは書論の語彙の出典を明らかにした初めての畫期的な辭典といえ、張彥遠『法書要錄』から近人の沈尹默の論文あたりまで、ほとんど全時代にわたる書論、文學論から語彙を採録している。これによって書論がけつして特殊なものでなく、他の鄰接分野と地盤を共通にする部分を持ち、具體的には文學や書論とどの程度、語彙を共通にし、またどの程度、差異があるのかを計る一つの尺度になりうることを示している。ただ難をいえば書論の原點である『法書要錄』をもう少し深く讀みなしてそこから引用すべき點がある。例えば「駸駸欲驂騑前」の語の出典に、張懷瓘『書斷』と康有爲『廣藝舟双楫』での用例を引くが、一番の原點である王僧虔「論書」を引くべきである。更に欲をいえばそこに込められた王獻之の皮肉まで説明して欲しい氣がする。また文學批評との關連でいえば、「羚羊挂角」の語には、朱和羹『臨他心解』、翁方綱「神韻論」の用例を引くが、この語が一般化するきっかけとなった嚴羽

『滄浪詩話』詩辯を引用すべきであろう。しかし、そうした改善すべき點も少くないが、書論が文學批評と同じ土俵に乗りうる對象であることを示した點では大きな意義があり、今後の書論研究、文學藝術批評研究の向うべき一つの方向が示されたといえる。

なお書論研究の出發點といえる『法書要錄』に標點が施され、利用しやすくなったのもここ十年ほどのことであり、次の三點が知られる。

⑦ 黃簡責任編輯『歷代書法論文選』（上海書畫出版社一九八〇）所收

⑧ 范祥雍點校『法書要錄』（人民美術出版社 一九八四）

⑨ 洪丕謨點校『法書要錄』（上海書畫出版社 一九八六）

⑦は後漢から清末までの歷代の書論九五篇を取りあげて、『法書要錄』とは題さないが、同書に収めるほとんどが收録され、標點されている。主に書苑菁華本を底本とし、簡體字を採用している。⑧は津逮祕書本を底本とし、王氏法書苑本、墨池編本から閣帖考正まで對校本を十二種に増しており、最も綿密な考訂がなされている。⑨は叢書集成初

編所收の津逮祕書本を底本とし、主に學津討源本を對校に用いている。いずれも苦勞の末の標點であり、現在のところ最も信頼のおけるスタンダードは⑧ということになると思うが、これとてまだ完全な底本とはいえない。ただ研究の出發點ができたことは確かで、版本間の字句の異同のどれを採用するかは、法書要錄所載の文章自體が斷片であったりして、解釋者の立場の相違に歸する面があるので一概には決定しがたい。

書論のテキスト本文が整備されるにつれて注釋も書かれつつあり、書論理解の參考になるので、以下數種を舉げておきたい。多くは明末、清人の書論の注釋で、侯文正輯注『傳山論書畫』（山西人民出版社 一九八六）、何書置編注『何紹基書論選注』（湖南美術出版社 一九八八）があり、いずれも具體的な作品への論評が主で、それに注釋が加わることで生きた鑑賞力が身につく構成になっている。特に前者は林鵬著『丹崖書論』（山西人民出版社 一九八九）とあわせて讀むとより理解が深まる。また清の劉熙載に『藝概』の著があることはよく知られるが、王氣中箋注『藝概箋注』

（貴州人民出版社 一九八六）が出て、文概、詩概、賦概、詞曲概には詳しい注が施され、文學史、藝術史の理解に役立ったが、書概には全く注が施されず、残念な思いをさせられていた。その思いを解消させるものとして

⑩ 金學智『書概評注』（上海書畫出版社 一九九〇）

が書かれた。書概本文が先秦から清朝までの書跡、碑刻によく眼くばりがされているだけでなく、正確で丁寧な注が加わることによって、清朝以前の中國書道史を作品中心に通史として理解できるばかりでなく、文概、詩概をもふまえた藝術批評史としても読むことが可能である。徐林祥主編『劉熙載美學思想研究論文集』（四川大學出版社 一九九三）所收の書法美學に關する論文も參考になる。文學との相關を考へる上で、顏中其著『蘇軾論文藝』（北京出版社 一九八五）、曾棗莊選釋『三蘇文藝思想』（四川文藝出版社 一九八五）とともに『書概評注』は役立つ書といえる。また網羅的で手輕なものに樓鑒明・洪丕謨編著『歷代書論選注』（復旦大學出版社 一九八七）がある。

書は半分技法によって支えられるので、技法に關する術

語辭典があれば便利であり、その成立が待ち望まれていた。ちなみに畫論には周積寅編著『中國畫論輯要』（江蘇美術出版社 一九八五）があり、章法、筆墨、設色、詩畫、書畫、題跋印章と區分され、先秦から清末までの歷代畫論や關連の文獻が引かれており、更に詳しい注が加えられているので便利である。その書論版が欲しいと期待されていたが、その技法論版として登場したのが次の二著である。

⑪ 崔爾平著『書法篆刻術語辭典』（陝西人民出版社 一九九〇）

⑫ 劉小晴著『中國書學技法評注』（上海書畫出版社 一九九二）

⑪は『中國書法大辭典』①を基礎にした増補改訂版で、篆刻の項目を加え、筆畫順に項目が並べかえられていて、利用しやすくなった。⑫の基本發想は⑪より學んでおり、筆法、筆勢、筆意の項目の立て方は基本的に同じであるが、より細かな部立てがなされ、筆法からは執筆法、運筆法を獨立させ、筆勢から永字八法、結構を獨立させ、その他の部分を細分化し、功力、字外功夫、墨法、弊病、各體書法、

學書方法、時代書風、鑒賞などの項目を立てている。引きやすいのは⑪、読みやすいのは⑫という特色はあるが、むつかしそうに見えた書學技法がわかりやすく明解な言葉で示された意義は大きく、書に對するアレルギー克服の契機とはなるであろう。ただ⑫には索引が無いのは不親切で、利用價值を半減させている。

### 三

以上で特徴的な辭典類の紹介を終え、以下論文の分析に入りたいが、基本的に一九八〇年以後の論文を扱うために、それ以前の文物の保存、記録等について一瞥しておきたい。周知のように、一九四九年の中華人民共和國成立以來、傳世文物と出土文物とを問わず文化財の國外流出は厳しく禁止され、國家の手によって保存され、博物館等公的機關に收藏されるようになった。その後文革期、即ち一九六六年末から一九七二年初頭まで約六年間、『文物』『考古』は休刊に追いこまれ、極端に情報が鎖されたが、文革終息以前の傳世文物のうち注目される事項としては、王珣の伯遠帖、

王獻之の中秋帖などが國外から買ひもどされ、陸機の平復帖、杜牧の張好好詩、蔡襄の自書詩、黃庭堅諸上座帖などが個人から故宮博物院に寄贈された。また萬歲通天進帖が遼寧省博物館に入ったことなどがあげられる。出土文物については枚舉に暇が無いが、一九七二年以前の中國書道關係の重要記事は、日本の平凡社『書道全集26補遺卷』にまとまっていいて見やすい。また一九四九——一九八四年までの出土文物、即ち墓誌、碑碣、買地券、造像記、墓碑、印章の目録は、日本の氣賀澤保規氏「中國新出石刻關係資料目録(1)(2)(3)」(『書論』第18、20、22號)にまとめられている。この目録は新出の漢から元までの石刻資料を年代順に配列し、掲載雜誌の箇所を記したもので、基本的には楊殿珣『石刻題跋索引』を引きつぐものであるが、これほど詳細な目録は中國でもまだ出ておらず、その續編が待たれる。なお一九一一——一九四九年というのは、書畫文物の研究情況が不透明でわかりにくい状態であったが、許志浩著『中國美術期刊過眼錄』(上海書畫出版社 一九九二)はよく雜誌の出版情況をひろっており、格段に視界が上ったとい

える。

次に研究論文の分析に入りたいが、まず主に扱った雑誌は『書法研究』『書法』『書法叢刊』『朶雲』の四誌である。こうした限定を加えた理由は、すべてを網羅することは個人の手にあまることが第一であるが、しかしこの四誌で主要な論文はほぼ把握できると思われ、數量的にも④でとりあげられた研究成果の八割近くが網羅されることである。且つ一つの雑誌を繼續的にながめることで、時代の變化が読みとりやすくなると考えられるからである。ただし必要に應じて『文物』『中華文史論叢』『古代文學理論研究』『學林漫錄』等をも扱うことにする。

まずどんな論文が多いか、何が話題になっているかを見てゆきたいが、上記四誌から最近十年間で比較的とりあげられる回数が多い(五回以上)藝術家個人をとり出してみようと、

王羲之、王鐸、王寵、何紹基、金農、龔賢、倪元璐、黃庭堅、黃道周、朱耷、祝允明、徐渭、沈周、沈尹默、

石濤、蘇軾、趙孟頫、張璪、鄭燮、董其昌、唐寅、莫是龍、傅山、文徵明、文彭、米芾(五十音順)。

らである。『書法叢刊』と『書法』は圖版が中心であり、勢い現存するものを紹介し論說する姿勢が強いので、明清以後のものが大半をしめてしまい、文學理論等のかかわりからすると、偏ってしまいうらいがあるといえる。且つそれぞれの藝術家に對する關心とアプローチはまちまちで、それぞれ別個に研究する必要がある、人氣の度合はうかがえても、一つの傾向や理論を抽出するのは困難である。

では『書法研究』を中心に、『書法』『書法叢刊』からは長文の論說を對象にして、書家個人でなく事項を中心にひろい出してみると、比較的論及の多いのは、

漢碑、墓誌、北朝石刻、寫經、明清書法、書法美學、傳統と創新、當代書法、時代風格、書法理論、書法教學、

らである。ここでははっきりと二つの傾向を見ることができ。即ち漢碑から明清書法までと、書法美學以下では全く異なる姿勢で書かれている。この姿勢はある時代を境に



變化が顯著になるのであり、より具體的にいえば、一九八〇年代後半までは、傳統書法の中でも篆書、隸書、章草、魏碑といった各書體の消長や復興について、また唐宋以降は各書人の書の風格に照準をあてた、いわば書道史の考證といった論文が比較的多かった。更に具體的には一九七九年に『書法研究』が創刊され、一九八九年に十周年を迎えるのであるが、それまでは、書道史を一本の流れにたとえれば、一言でいえば、その流れの中の空白を埋める作業が主流であったといつてよい。その空白が少なくなるにつれて、各書人、各書跡に對してでなく、書をトータルに、新しい切り口でとらえようとする立場が顯著になってきた。特に一九九〇年第一期の十周年記念號からははっきりと、書の本質は何か、現代において書は有效かという根本的な問いかけの論調が主流となつてくるのである。（ちなみに、九〇年から論文を當代書論、古代書家といった分類が行なわれ、九三年からは季刊から双月刊に増刊されている。）限られた紙面、多方面な包括的な紹介は不可能に近いので、本稿では、この論調の傾向をよりくわしく見てゆきたいが、そのために

## 紹介

書論を扱いながら、傳統的な中國書法史を組み立てること  
に大きく貢獻した沈尹默、啓功、謝孟海らの業績は残念な  
がら充分に取りあげることができなかった。それは別の機  
會にゆずり、傳統的な中國書法史とは何か、それはどんな  
意義を持つのかを検證するためにも、上記の傾向にこだわ  
って見てゆきたいが、先にあげた事項の中でも、書法美學、  
傳統と創新、當代書法にかかわる論は九〇年以前でもやは  
り突出して多かったものであり、その傾向の前兆はあった。  
ちなみに『書法研究』一九七九～八八の創刊から十年間の  
論文の中から上記の傾向に關係すると思われる論文を列舉  
すると次のようになるが、繁雜になるので便宜上、後半五  
年のみに張つて例示すると、

王世德「初論中國書法藝術的美學特徵」〔『書法研究』一  
九八四年第四期。以下『書法研究』掲載のものは八四・四の

ように略稱する）

張學棟「關於『關於什麼是書法美』」（八四・四）

王乃棟「談書法藝術的形象性和抽象性」（八四・四）

顧鶴冲「論書法藝術的美學特徵」（八五・二）

韓天衡「書法藝術美感試說」(八五·二)

郭不「從黑白世界中看書法藝術美」(八五·二)

毛萬寶「試論書法藝術的共同美」(八五·二)

梁揚「關於近年來書法美學討論的綜述」(八六·二)

章祖安「模糊·虛無·無限——書法美之領悟」(八六·二)

(二)

毛萬寶「論藝術通感在書法藝術中的作用」(八六·三)

韓書茂「論書法藝術的本質屬性」(八七·三)

章祖安「書法中和美層次剖析——并與文學藝術略作比較

研究」(八七·四)

張偉生「試論書法藝術的兩重特性」(八八·二)

拓之「書法藝術的本質特徵」(八八·三)

胡傳海「中國古代書法理論的幾大民族特徵」(八六·四)

章行「中國現代書學理論研究述略」(八六·三)

沈培方「對當代中國書法的思考」(八七·二)

章祖安「論書法對漢字漢文的依存——兼論所謂現代書

法」(八八·二)

趙炳中「書法理論中的附庸性及改觀趨議」(八六·四)

盧輔聖·江宏「歷史重負與時代抉擇(上·下)」(八七·一

八七·二)

吳添汗「反思與抉擇——與《歷史的重負與時代的抉擇》

商榷(上·下)」(八八·一八八·二)

黨禺「『狂怪』和『創新』」(八五·四)

陳梗橋「創新末議」(八七·二)

朱以撒「書法創新的量質觀」(八四·三)

陳必武「試論書法欣賞的逆反心理」(八八·二)

鮑賢倫「對用筆與結構關係的再認識」(八八·三)

闕長山「淺議作書的心理壓力」(八八·四)

彥和「漫談臨池必先讀書」(八六·三)

湯其根「禪定與書法」(八七·四)

王榮發「書法欣賞心理分析」(八八·二)

黃惇口「書法神彩論研究」(八六·三)

倪偉林「書意三題」(八七·三)

王業霖「書卷氣雜識」(八六·四)

李文采「書外功與書內功」(八八·二)

鍾家驥「氣質與書法」(八四·二)

叶效原「淺論節奏」(八四・二)

沈季林「談談書法上的悟」(八四・三)

歐陽龍「常與變」(八四・四)

邱振中「運動與情感」(八五・三)

方堯明「力、力感」(八五・三)

駱恒光「論『意在筆前』之『意』」(八七・二)

蔣北耿「書法和書法家問題的窺探」(八七・二)

姚淦銘「論漢字的象形在書法藝術中的昇華」(八八・二)

張森「書法品評管見」(八五・一)

張鐵民「從內擲外拓談到書法書法欣賞」(八五・四)

王崗「中唐尚實尚俗的書法思想」(八七・四)

王崗「狂禪風中的變態美」(八八・一)

等であり、あまりに多い。同じ論調でも書家個人に的をしぼったもののぞいており、すべてをひろっているわけではないので、ほとんど收拾つきかねるほど多いといえる。多すぎて梁楊「關於近年來書法美學討論的綜述」(八六・二)のようなまとめが出たりするが、それがきっちりした共通理解とならないために、またぞろ似たような論文が出

## 紹介

てくる。業を煮やして趙炳中「書法理論的附庸性及改觀趨議」(八六・四)のように、書論は從屬性が強いために、傳統に、政治に、外國人に、書家に、新聞雜誌にとらわれて從屬し、自立できないのだ。もっと學問、藝術に眞摯にとりくまねばと自己批判する論文もある。こうした論調はその後も續くのであり、九〇年代以降ますますその傾向を強めるのであるが、この論調が出る一つの背景には日本の前衛書道がある。即ち文字を書くのではなく、墨色と線で勝負する存在に對し、中國書法は何かを問いなおす必要にせまられていたことがあるが、より多くは、社會が近代化する中で變化してゆくのに對し、書はとり残されないかという不安が大きく横たわっていると考えられる。例えば、

王南溟「古典的黃昏」(九一・三)

馬嘯「失去的傳統」(九三・二)

は、前者は南宋から明末までの雅とされた帖學のたどる運命を述べており、後者は傳統帖學の集大成者とされる沈尹默の實力は虛名ほどではないとききおろしに近い面もあるが、書の傳統や存在が自明のものではないという危機意識

無くしては書かれないであろう。更に、

梅墨生「趣議當代書法的窘境及其文化性」(九三・五)

になると、書が傳統の中にはまりこまずに、どこに立脚地點を見い出すべきか、更にワープロ等の近代機器の出現にいかに対處するか模索する姿は悲愴でさえある。これは畫論についてもいえ、中國が近代化を進めてゆく中で、中國繪畫が世界的に流通するようになり、數年前とは桁ちがいの價格でとりひきされるようになると、中國畫とは何か、文人畫とはいかなる經濟價值を持つのかを問ひなおす必要にせまられ、

蕭燕翼「論文人畫の歴史必然性」(『朶雲』一九九二・三)

曹星原「董其昌與李白華——文人的理想與經濟社會的實

現」(同右)

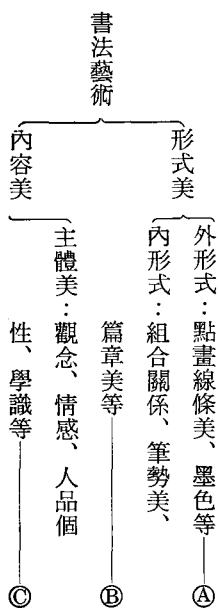
張學顏「藝術市場與中國畫復興」(同九三・二)

など次々と書かれているが、世界經濟に巻きこまれる中で獨自の價值はどこに在るかを模索する危機意識が背後に強く存することががえる。

しかし模索だけでは話が進まないもので、整理をしてゆきたいが、さきの論調は錯綜していて見えにくい、大きな柱として書は抽象的なのか具象的なのかという、金學智、陳振濂氏らの間で行なわれた論争、宗白華氏を中心とする書を美學の一環として哲學的に位置づけようとするもの、蔣彝氏のように書を他の藝術、例えば建築、繪畫との比較で考察しようとする立場などが目立つが、現在のところ書を次のように位置づけるのが最も穩當で有效なのではないかと考えられる。即ち

吳添汗「反思抉擇——與《歷史的重負與時代的抉擇》商榷」(八八・一、二)

の論文で、盧輔聖、江宏氏の論文に對する補正として書かれたもので、次のように書をとらえている。



〔客體美（作品）：神彩、氣韻、

意境、風格等〕——①

これによれば、書を他のジャンル、特に文學との相關においてとらえようとするのを一つの眼目とする本稿においては①のような作品論としてとらえてゆくのが、不毛の議論に陥らない一つの方法なのではないかと考えられる。ちなみに意境について書かれた論文についてみると、

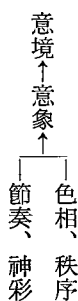
桑火堯「書法意境及其載體研究」（八九・二）

叢文俊「書法意象批評釋名」（『書法』一九八九・三）

黃綺「論中國書法意象的高純度與雅俗問題」（八九・三）

沈忠喜「意象在書法創作中的作用」（九一・三）

桑氏の論は「意象」は「意境」をかたちづくる材料だが、「意境」は「意象」が組みあわされて昇華したものであり、圖示すれば、



となることを示した短い紹介であり、叢氏のものはそれと過去の書論に應用し、沈氏のものは、書法創作過程に應用

している。黃氏の論は歷代の書論を博搜し、意象の高度純度の判別をし、雅と俗に結びつけて考えるもので、意欲的な試みをしている。しかし總じて意境論は、文學批評の世界で構築されてきた理論を應用するだけで、まだ書の方法論として十分に消化されておらず、文學理論からの「借り物」という印象はぬぐえない。『古代文學理論研究』に収める意境に關する諸論考（例えば胡雪岡「試論『意象』」第七輯）や袁行霈氏の一連の論考（邦譯に『詩の藝術性とは何か』一九九三汲古書院がある）には遠く及んでおらず、それらをふまえた上での次の展開が期待される。しかし神彩論については見るべき研究がある。

黃惇「書法神彩論研究」（八六・三）

がそれで、南齊の王僧虔『筆意贊』にいう「書の妙道は、神彩を上と爲し、形質之に次ぎ、之を兼ねる者は、方に古人を紹ぐべし」という神彩は、書家の思想や感情や修養のあらわれであり、美の理想が託されたものである、という所から出發し、六朝から唐の神彩論を検證し、特に張懷瓘の神彩論の構造と後の書論に與えた影響まで説いてよくま

とまっている。ただ王僧虔の書論は「論書」が代表的で、「筆意贊」は『法書要錄』に收められていない、後世の輯本からの摘出であり、テキストとして一級ではないが、⑦或いは『中國美學史資料選編』（中華書局 一九八九）に收められて他分野からの論及も多くなったもので、読みやすい書論だけに氣をつけなければならない面がある。神彩論はつきつめれば精神と形似ということで、形象に依據しなければならぬ。畫論の世界は形似論として論及も多い。畫論の研究誌である『朵雲』には題畫詩や畫論と文論の相互滲透など繪畫と文學の關係を考える上で有益な論文が多いが、

江宏「論『形似』」（『朵雲』一九八八・四）

は、形以を中心に、歷代の品題法、形神論にまで眼がゆきとどいており、

黃廣華「關於『形似』與『神似』」

吳琦幸「說『神』」（いずれも『古代文學理論研究』第十六輯）らと補いあう所がある。しかしおもしろいことに、管見では書論は神彩論までは成立しても形似論は成立しない（ちなみに「形似」の語は、宋以前の書論では唯一の例外である黃庭

堅の語をのぞいては見えない。拙稿「文學と書畫」與膳宏編『中國文學を學ぶ人のために』世界思想社所收参照）と考えられるのであるが、中國では相互性への論及は多いものの、その限界性、有効性を説いたものは、まだほとんど無いように思われる。

相互性の論及の一環として、書を他の分野との関連でとらえようとする論文が多くなっているのが、最近の顯しい傾向であり、例えば、

鄭曉華「書法藝術與傳統文化精神」

辛塵・文田「從古代醫學理論看書法『中和』原則」

邱振中「書法理論中的語言問題」（ともに九三・二）

らがあるが、これらは書を言語學や傳統文化、特に儒家、道家、佛教、醫學などの密接な關係とそこから光をあてる可能性を述べているが、書論の自立性の證明というより、他の領域からの確認といった意味合いが強く、まだ試行の段階といえる。ただ瘞鶴銘を中心とする道家からの研究が多くなりつつあるが、例えば、

陸九皋「瘞鶴銘綜述」（『書法叢刊』第二六輯）

王淵清「從瘞鶴銘的藝術特色談中國道家藝術精神」(九三・一)

などは、今後の新しい研究の一つの方向を示しているといえる。また中唐を扱った論文、例えば、

王崗「中唐尙實尙俗的書法思想」(八七・四)

などは、古文復興という文學の革新運動を、主に書論の資料を使って描くことに成功していると思われるが、これは中唐という特殊な時代のなせるわざであろうか。

總じて書と鄰接領域との連關を説く論は、關係性の指摘にとどまっいて、まだ方法論的に確立しているとは言いがたい。難い情況であるが、刺激的で活況を呈しているとは言えるであろう。

#### 四

以上で、論文の傾向に關する紹介を終え、急ぎ足になるが、これまで述べられなかった特徴的な單行本について述べてしめくりとしたい。

その一つは一つのキーワードで書法、繪畫、文學に通底

#### 紹介

するものを讀みとうとする試みであり、次のような書がある。

涂光社著『勢與中國藝術』(中國人民大學出版社 一九九〇)

陳良運著『文與質・藝與道』(同右 一九九二)

特に前者は書勢、筆勢、體勢といった書の基本術語をキーワードに、書の文獻を博搜することはもとより、繪畫、文學における勢、傳統文化における勢の意識の廣泛な存在と古代藝術論における價值と現代意義まで説いており、通史とは異なった斬り方で、藝術總體を見直すという意欲にあふれている。

これと同じような動きと思われるが、個人で中國書道史を書き直す人が出てきた。

朱仁夫『中國古代書法史』(北京大學出版社 一九九二)

王景芬『論古代名家書法』(西冷印社 一九九二)

朱氏のものは、新しい出土資料を玉石あわせてとり入れて特に古代の部分を充實させているが、書法全集といった網羅性よりも、一つの視點、即ち傳統はたえまない創造の歴史であるという視點で中國書法通史を描ききろうとする

姿勢が濃厚である。王氏のものは歴代の著名な書家に新しい解釋を與え、人物中心に新しい通史となることに主眼を置いている。例えば顔真卿では「驚心動魄 獨避蹊徑」というタイトルを與え、それぞれの筆迹に有機性を持たせようとしているが、資料はかつてのように中國に片寄ることなく、最新發見の日本、臺灣のものまでひろっており、『中國書法』主幹ならではの細かい鑒定まで眼がゆきとどいており、中國書法史も新しい段階に入ったことを思わせる。

また注目すべきこととして「書法學文庫」と題するシリーズが創刊されたことである。これは浙江美術學院の陳振濂氏を中心とする書法學樹立の試みであるが、基本姿勢としてこれまで述べたような他の領域との關連でとらえるといった從屬的な方向をとらず、積極的に學問的に自立することをめざしている。發刊されたばかりの一冊、陳方既『書法技法意識』（浙江美術學院出版社 一九九二）を見ると、技法に關する意識を過去から現在まで、他の領域まで廣く射程に入れて論じており、先の涂光社氏の書と似たものを感じさせる。こうした現象が起る背景には、恐らく石刻・

金石資料は、出土品の増加もあって文革前とは比べものにならないほど増え、資料集成も陸續と刊行されつつある現在（主なものでは『北京圖書館藏中國歷代石刻拓本匯編』中州古籍、『中國美術全集・書法篆刻編』人民美術出版、『中國書法全集』榮寶齋らがある）、自立的に見直さないと膨大な資料の中に埋没してしまう危機意識があると思われる。文字資料としての書だけでなく、藝術としての書、書寫としての書とは何かを問い直す姿勢が見てとれ、今後の成果を期待したい。

以上で全體の論述を終えるが、最後に感想というか苦言を呈しておきたい。それは書法の論文には注が少ないことである。注が少ないということは原文の孫引きが多いということであり、卷數表示の少ないことでも證明される。更に悪いことには、孫引きが多いことは先行論文に依據しているわけであるが、それを明示しないことが多く、自分の論のように書くので、誰の説なのかわからないことがしばしばある。その結果の一つが、傳統と創新の所で見たような、堂々めぐりの似たり寄つたりの論文の多さになってい



と思われる。中には殷葆、王崗、水賚佑氏の論文のように、きっちりと考證、作品分析を行ない、注を具えたものもあるが、それらはまだ少數派である。それは單行本にもあらわれ、例えば馮亦吾『書譜解說』（國際文化出版 一九九二）、馬永強『書譜・書譜譯注』（河南美術出版社 一九九三）と『書譜』の譯注があいついだ、『書譜』にはすでに朱建新『孫過庭書譜箋證』と馬國權『書譜譯注』があと定まった評價があるにもかかわらず、それへの言及が無

く、結果的に似たレベルにとどまっていることからうかがえる。恐らく研究者同志の情報交流が少ないことが、こうした事態を引き起こすのであろうが、今後は注をしっかりと書くことで先行の業績を謙虚にうけとめ、それを越えるものを發表する、即ち學問の基本が守られるよう要望して、本稿をしめくりたい。

（京都女子大學 大野修作）